

# 高専における課外活動指導に関する一考察

## — バスケットボール部指導を通して —

須甲 克也\*

A case study on the teaching of extra-curricular activities in college of technology  
— through the teaching of the basketball club —

Katsuya SUKOU

The club activities in a college of technology are characteristic, unlike a high school, a college or university. The education effect is high and there is value for the both sides a student and a teacher. In this paper, I show as concretely as possible the present condition of the Oyama national college of technology basketball club in detail. And I generally show the usefulness and the problem of the club activities in a college of technology.

KEYWORDS: club activities, basketball club, education effect

### 1. はじめに

高専は5年制、専攻科を入れれば7年制であり、在籍する学生の年齢幅が大きい。そのような学生たちが一緒に課外活動をする際には、高校や大学とも異なる高専独特の特徴がある。小山高専のバスケットボール部の指導状況を例にして、高専における課外活動指導に関して、その有効性と問題点を整理し、課外活動指導の高専教育における役割や意義を提示する。

筆者は小山高専において1989年度より現在まで継続してバスケットボール部の指導をして25年目になる。その間、高専大会との関係には大きな変化はないが、市民大会等の地域大会との関わり、栃木県バスケットボール協会主催大会との関わり、1994年より正式に参加することが認められた高体連主催大会との関わり等、については大きく変化してきた。それに伴い、指導体制についても実質的に1人の顧問のみがほとんどの業務を担当

していた時期から始まり、複数の顧問が協力して業務を担当する状況や、さらに外部コーチをお願いして指導協力してもらう状況にまで、様々に変化してきた。

本稿ではそれらの経緯については簡単に述べるにとどめ、あくまで現状の指導状況をできる限り具体的に詳細に説明することにより、現段階における有用点、問題点を明らかにする。

### 2. 小山高専バスケットボール部の現状

#### 2-1 部員および指導者の構成

今年度2013年度当初の部員構成は、選手33名(1年生7名、2年生8名、3年生6名、4年生4名、5年生8名)、マネージャー3名(1年生1名、2年生2名) 指導者は、顧問教員6名、外部コーチ1名。

学生リーダーについて、高校大会においては、6月に開催される全国高等学校総合体育大会(イ

\*1 一般科(Dept.of General Education), E-mail: sukou@oyama-ct.ac.jp

ンターハイ)県予選までは3年生がキャプテンを務め、その後は2年生がキャプテンを務める。高専大会においては、4年生または5年生がキャプテンを務める。上記のように大会毎に中心となる学年が変わるので、各学年毎にリーダー学生を指名している。リーダーは学生たちが相談して決めることが通例だが、顧問が指名することもある。

## 2-2 対外試合の年間スケジュール

1~3年生は高校の大会、1~5年生は高専の大会に参加している。年間の参加大会を時系列で並べると以下ようになる。これらは公式大会または定期交流戦で毎年必ず参加しているものである。

- 4月 ① 栃木県高校総合体育大会  
兼関東大会予選
- 5月 ② 群馬高専との定期交流戦
- 6月 ③ 全国高校総合体育大会  
(インターハイ)栃木県南部地区予選
- 7月 ④ 小山市内中学高校交流大会  
⑤ 関東信越地区高専大会
- 8月 ⑥ 栃木県協会長杯高校1年生大会  
⑦ 栃木県南部地区リーグ戦(予選)
- 9月 ⑧ 全国高校選抜優勝大会  
(ウインターカップ)栃木県1次予選
- 11月 ⑨ 栃木県南部地区リーグ戦(決勝)
- 12月 ⑩ 東日本高専大会
- 1月 ⑪ 栃木県高校新人大会県関東新人予選

また、上記大会のうち①③⑤⑧⑪は勝ち上がった場合には上位大会に参加することになるが、小山高専が過去出場経験があるのは以下の通り。

- 6月 ⑫ 全国高校総合体育大会  
(インターハイ)栃木県予選
- 8月 ⑬ 全国高専大会
- 11月 ⑭ 全国高校選抜優勝大会  
(ウインターカップ)栃木県2次予選

また、上記公式大会や交流戦以外にも、不定期に、練習試合として対外試合を実施している。公式大会と練習試合を合わせると、年間の対外試合日数は25日程度、試合数は40試合程度(対高専15試合程度、対高校25試合程度)を実施している。

校外での対外試合日数は、最大で年間20日程度になるが、顧問および外部コーチ7人で手分けを

して、なるべく2人の引率体制をとっている。

## 2-3 普段の練習について

合同練習は年間を通して、週5日(月火木金土)実施している。授業日は、放課後~午後7時、授業のない日は、9時~12時、体育館の使用状況により13時~16時の場合もある。恒常的な合同練習の休みは、週2日(水日)であるが、学生の希望により自主練習を許可している。

また、前項で述べた公式大会直前でなければ、学校の定期試験の始まる1週間前から合同練習は休止にしている。

指導体制としては、顧問の1名と外部コーチの計2名が日本バスケットボール協会(以後JBAと略す)公認コーチライセンスを取得済、また顧問の別の1名がバスケットボール経験者であるので、学生練習時には筆者および外部コーチが、できる限りコーチとして練習に立ち会っている。

4~6月中旬は前項大会①②③に備えて、高校チームとして低学年を主体とする練習を実施。

6月中旬~7月中旬は高専大会⑤に備えて、高専チームとして高学年中心の練習を実施。

7月中旬~9月は⑥⑦⑧に備えて、高校チームとして低学年中心の練習を実施。

10~1月は⑨⑩に備えて、高校チームとしての練習と、11~12月は⑪に備えて、高専チームとしての練習を並行して実施。

もちろん、低学年と高学年のどちらかを主体にしたとしても基礎練習部分は共通メニューで一緒に練習することになるが、大会が近づいた際、レギュラーメンバーを中心としたゲーム形式の練習の割合が増えることになる。

練習メニューの作成は基本的にコーチが行っているが、学生リーダーを中心として学生たちの意見も聞きながら作成している。基本的に練習時にコーチが練習を見ているが、都合で不在のとき、事前の指示がない場合は、学生リーダーが練習メニューを決めている。日々の練習メニューやそのメニュー毎の結果については、マネージャーが全て記録しているので、コーチ不在時の練習状況もある程度確認できる。特にシューティングの成功率やドリル練習時のミス数、ゲーム形式練習時のシュート数および成功率、リバウンド数、カットやルーズボール獲得からのターンオーバー数を、全て個人毎に記録している。

およその練習メニューは以下の通り。1回の練習で全てのメニューを行うのではなく、選択的に行う。また、途中で適宜1~2分の休憩をとり給水させる

ミーティング  
ランニング、ストレッチング、  
体幹トレーニング  
ダッシュドリル、フットワークドリル  
ランニングシュートドリル  
パスミートからのレイアップドリル  
シュート練習（フリー・ミドル・3ポイント）  
2メン・3メンの速攻ドリル  
ゴール下のムーブドリル・ゴール下1対1  
ハーフコート1対1・オールコート1対1  
ハーフコート2対2・3対2・3対3・5対5  
オールコート5対5  
ダッシュドリル、ランニング、ストレッチング  
ミーティング

それぞれのメニューについては、一般的なバスケットボール指導書等にある既存のものを中心としているが、そのときのチーム状況に合わせた作成したオリジナルなメニューもある。

また、それほど回数は多くないが、体育館が使えないときの外練習の場合は走ることを中心とした練習を行う。希であるが、サッカー部や陸上部と合同の練習をする場合もある。外練習のメニュー作成には、陸上部の練習メニューを参考にさせてもらっている。

### 3. 小山高専における部活動の有用点

#### 3-1 学生との信頼関係の構築

はじめにも述べたが、高専では5年間あるいは7年間の継続した部活動ができる。バスケットボール部に関して言えば、現状では専攻科生はいないが、過去には専攻科生が所属していた。

長い期間をかけて個々の学生と接することにより、深い信頼関係を築くことができる。このことは、中学高校等でも同様であるが、高専の場合は、高校と同じ年齢においては、指導者側からの強制的な指導の割合を多めにしている状況から、高学年になって所謂大学生と同じ年齢においては、強制的な指導の割合を減らし、選手自らにも今自分たちに必要なメニューを考えさせて練習させてい

る。その結果、高学年の選手たちは、指導者側に対して意見の主張もできるようになり、後輩たちに対しての指導的存在として成長していく。この状況は学生たちの年齢構成から考えると高専ならではの特徴的な状況である。勿論、最終的な指導の権限はコーチにあるが、常に練習に立ちあえるとは限らないので、指導力のある上級生の存在は必要である。

また、教員としても、1人の学生とある程度密接な関係を保ちながら継続的に学生を見ることにより、その学生の変化や成長を体感することができる。学生の変化は個々に異なり決してマニュアル化できないにしても、この経験は部活動指導にとどまらず、学内における他の学生の指導に対しても大いに参考にできる。

また、部活動指導で学生と一緒にいる時間が物理的に長くなると、具体的な指示を出したり、指導する場面以外においても、教員がどのように行動し発言しているかを、学生たちは継続的に目にするることになり、学生側もその教員の考え方や行動の仕方を自然と理解するようになる。

バスケットボール部では、筆者は通常は週10時間以上、学生と一緒にいるので、その行動や発言に接している部員たちは、その影響を自然に受けることになり、高学年になるほど、特に教員側が指示しなくても、自分で考えて行動できるようになる。特に礼儀や先輩後輩との人間関係については、年齢幅があるグループであるということの効果は大きい。また万一、学生と顧問教員との人間関係が上手く行かない状況が起きたとしても、あくまで部活動は任意の活動であるので、退部することも可能である。

#### 3-2 学生の社会性の涵養

高専どうしで対外試合等の交流をする場合、県内に他高専がないので県外への遠征を行う。宿泊を伴う遠征もある。高校との試合のような近隣への遠征に比べると、学生にとっては大きなイベントであり、移動や宿泊に関わる行動については、より社会性が要求される。

特に、今年度は高専地区大会を主催したこともあり、その大会準備に関しては選手であるなしに関わらず、部員全員が自分たちが主体的に大会を運営し成功させる必要があることを自覚し、それに関わる準備や、当日の業務や最終的な片づけに

至るまで関わることで全て社会性の涵養に繋がっている。このような経験を積んだ上級生は、例えば、遠方への遠征時において引率教員が1名のみとき、顧問教員に同行して、引率の補助的な役目を十分に果たしてくれる。

これらの社会性の涵養については、日々の練習指導の中でもある程度可能であるが、大会運営や遠征を経験することにより、その効果をあげることができる<sup>1)</sup>。

### 3-3 学生どうしの交流の場

3-1でも一部述べたが、学生どうしの人間関係構築にも大きな効果がある。

高専は各学科1学級の場合が多く、課外活動をしなければ、なかなか学科や学年の枠を超えた交流は広がらない。学生会活動や学寮における生活、各種委員会活動を熱心に行っている学生にも同様の効果があるが、部活動は学生どうしの接する頻度としては、学寮におけるものに匹敵する。

学寮は生活の場であるので、その親密さは絶大であるが、逆に指導者の目が届かない場合も起こり、何か問題が起きたときの関係修復が難しいことに比べると、部活動のグループは指導者が把握することに関しては人数的に手頃であり、指導者の目が比較的届くことが利点である。部活動は目的が明確なために、所属する学生同士が競い合い切磋琢磨する場面が多いので、より密度の濃い人間関係がつけられる。トラブルも少なくないが、それを乗り越えさせることが人間関係構築やコミュニケーション能力の向上に繋がる。

### 3-4 少人数教育の場としての効果

これについても3-1で一部述べたが、部活動は学生に対する個別指導をするための理想的な環境でもある。筆者は一般科で数学を担当しており、卒業研究を担当していないが、教員と学生個々との繋がり面から見ると、卒業研究に匹敵する密度がある。筆者は教科教育の場面においても、授業による集団教育に並行して、個別指導や少人数教育について色々な工夫をしているが、部活動についても教科教育と同様に集団に共通な指導と個別指導を並行して行っている<sup>2)</sup>。

学年毎に分けた指導、部全体としての共通指導、技術面の指導、精神的面の指導、学生会や学校や外部団体との関わりに関する指導等、様々な局面

に合わせて、段階を踏んで指導していくことは、教科指導に比べて、社会性の涵養のためには効果があり、そのための指導方法や指導力養成の意味で、顧問教員自身の能力向上にも大きな効果があることを実感している。

筆者は常々、高専の良さの大きな部分は、少人数指導や個別指導の場面が多いことにあると考えているが、部活動という環境はその中でも重要な場面である。

現在、高専に所属する教員にとって、教育、研究、地域貢献は大切な3つの柱であるが、部活動指導に積極的に取り組むことは、教育における学生指導や、直接的な地域貢献ではないにしても、学外の団体との関わり合いを通して地域との交流関係を築くことができ、教員自身の社会性涵養に繋がっている。部活動指導は、ともしれば自分の専門分野に閉じこもり視野が狭くなりがちな状態から抜け出す良い機会になる。

練習中の具体的な指導として指示をするタイミングとしてはいくつかある。まずはじめに、合同練習前の全員に対する指導では、その日の練習全体を通しての目的について説明、練習メニュー毎にそのメニューの目的やポイントについての説明や指示を行う。個人的な指導は、練習中に個別に呼び出して行う場合と、全体練習を止めて全体にも確認しながら個人的な指導をする場合に分かれる。特に後者の方法が重要で、個人に注意したり指導する形で全員に指導している。これは、数学の授業に例えると、学生を個別に指名して黒板で演習問題を解かせながら指導することで、クラスの学生全体に指導していることと同様である。

最終的に1日の練習が終わった後には、全体ミーティングを行い、全体に対するその日の講評に加えて、個別に気になることを個々に指導している。この際も個々に指導している形で全体に理解させる意図がある。

また、全体ミーティングでは低学年部員は、自分の意見を言うことが難しい。従って、特に対外試合の後は、個人毎に自分自身の反省、チームとしての反省事項をメールで顧問とコーチに送付するように決めている。自分の意見を言いにくい状況でなく、必ず自分の意見を何かしら文章にまとめることを必須にしている。以前は個人ノートに書かせていたこともあったが、紛失や提出の不徹底があったので現在ではメールで行っている<sup>3)</sup>。

また、教科指導をすることと、部活動指導をす

ることは、テーマや内容が異なるだけで、教育指導するという面から見れば同じであり、お互いに相乗効果をあげている。

### 3-5 他の部活動との関連

2-3で述べた他の部活動との合同練習も、他の部活動との関連の一つであるが、普段から学生に対して他の部活動や課外活動の活躍を意識させ、競わせる気持ちを持たせるようにしている。他の部活動が大会で勝ち上がり上位大会に進出していることを積極的に知らせ、自分たちも頑張ろうという雰囲気につなげる。

また競技が異なっても、運動部を指導している立場から、他の部活動に所属している学生とも部活動というテーマで話を聴いたり相談にのったりすることができる。

学生から見た場合、筆者は、ある時は数学教員であり、ある時は学級担任であり、そしてある時はバスケットボール部の顧問である、という具合に、教員は学生にとって色々な顔を持つのは当然であるが、部活動顧問としての顔は中でも大きなものの一つになりうる。教員が学生に対して色々な顔を持って接することにより、一つの顔では知り得ない学生情報を知ることができる。

課外活動指導に熱心に取り組むことにより、上記のような認識は学生ばかりでなく、教職員も同様であり、課外活動に関わる件については必ず事前連絡や相談が入るようになる。例えば、普段バスケットボール部が練習場所として使っている体育館について、事前に使用届けが出されていない放課後や休日であっても、必ず事前にバスケットボール部に問い合わせが入る。

### 3-6 教員どうしの関連

顧問教員としては、同じ部活の顧問どうしの情報交換、他の部活の顧問との情報交換等、部活指導というテーマで話をしたり悩みを相談したりすることができ、教員どうしの関係づくりにも役立っている。教員の多くは教科指導や教科教育については既に専門的な知識や技術を持っているが、課外活動指導については素人の部分が多々ある。先輩顧問教員より説明を受けたり、自分自身で試行錯誤しながら実践していく中で、同じように部活動指導に勤しむ教員と、課題や悩みを共有することができ、それを元に信頼関係を構築すること

ができる。

小山高専のバスケットボール部の顧問は6人いるが、普段の練習を実際に指導しているのは主に筆者である。継続的に学生を観察しているので日々の小さな変化に気がつくことができるが、大きなスパンでの選手の成長や変化については、意外に見落としやすい。筆者以外の顧問は時折体育館に来て練習見学をしたり、対外試合時の引率をしてもらっている。その際に、ある程度の期間を挟んで部員の様子を見てもらうことになるので、筆者の見落としがちな部分についての助言をもらうことがしばしばあり、大変参考になっている。

対外試合の引率の割り当てについては、年度当初に1年間の予定を予め立て、各顧問3～4回の引率を行っている。それぞれの顧問教員に対して毎年ほぼ同時期の大会引率をお願いしている。例えば昨年度7～9月の大会引率を担当していた教員には、今年度も同じ7～9月の大会引率を割り当てるという具合である。その結果、部活動全体の経年変化を感じてもらい、その点についての学生へのアドバイスに繋がっている。

また、不定期であるが、月に1回程度のペース、年間で10回ほど、各顧問に対して「バスケ部活動報告」というタイトルのメールを配信している。実際に顧問全員が集まって話をする機会をつくるのは難しいので、メール配信で情報共有をしている。内容としては、最近の部活動の状況や雰囲気、対外試合の結果と今後の予定などである。試合引率に際し、これらの情報共有が役に立っている。

他の部活の顧問との関係としては、先にも述べた陸上部やサッカー部の他に、野球部やバドミントン部の関係者とも頻りに話をしている。特に陸上部の顧問は体育科の教員でもあるので、部活動全般のことについての相談を頻りにさせてもらっている。また、バスケットボールという競技を通じて、他の高専や近隣高校の顧問との繋がりや、市や県の協会との繋がりもできている。

これらの関係性のおかげで、例えば主催する高専地区大会の運営が可能になっている。

## 4. 小山高専における部活動の問題点

### 4-1 学生の部活動離れ

小山高専においては、部活動、特に運動部に入部する学生が減ってきている。部活動への所属は

任意であるので入部を強制していない。以前は寮生は必ず運動部に所属しなければならないルールを設けていた時代もあり、当時は部活動に限らず学生会活動を初めとする課外活動の多くにおいて寮生が中心的な役割を演じていたが、現在は寮生と通学生を比べて大きな差はない。むしろ寮の1年生は寮内業務が多いので、運動部等の身体的に負荷のかかる活動を避ける傾向がある。また、入部しても実際に活動に参加できない場合もある。

バスケットボール部を例にすると、ここ5年間の入部者数と現在も実質的に活動している人数は以下の通りで、特に減少している訳ではない。

2009年度	8人入部	うち5人活動
2010年度	6人入部	うち1人活動
2011年度	9人入部	うち4人活動
2012年度	14人入部	うち9人活動
2013年度	9人入部	うち6人活動

この5年間での減少傾向はないが、さらに5年、10年と遡れば、減少傾向はある。また、入部者の減少もさることながら、入部後に練習に参加しなくなり、実質的な活動人数が減っていることが問題となっている。授業のある日は放課後にあまり時間がとれないので、最終的にゲーム形式の練習が多くはできない。従って授業のない土曜日や祝日の練習に時間をとってゲーム形式の練習を増やそうとするも、そういう日の方が部員の集まりが悪く、ゲーム形式の練習ができないことがしばしば起こる。

3-3でも述べたとおり運動部での活動は、学生にとって心身ともに鍛えることができ、学年や学科の枠を超えた人間関係づくりが可能であるが、そういうことを避ける学生が多くなっている。卒業して社会に出ることを考えると、学寮や部活動の中の人間関係に揉まれることことで、精神的な強さを身に着けることができると思われるが、そのストレスに耐えられないと判断して最初から避けている傾向を感じる。

#### 4-2 スケジュールリングの難しさ

バスケットボール部は正式に高体連に参加しているので、2-2であげたように比較的多くの大会に参加している。ところが栃木県の高等学校の多くが3学期制であるのに対し、小山高専は前後期の2学期制であるために、大会の時期と定期試験の時期が重なることがあり、勉強と部活動の両立

が難しいことがある。

年間の大会スケジュールは年度当初にわかっているもので、部員には日頃より勉強をして、試験直前の勉強だけに頼らないように指導しているが、実際にはなかなか難しい。具体的には前期中間試験と全国高校総体の栃木県予選が近い、また、後期中間試験と栃木県高体連南部地区秋季強化リーグが近い。学生には試験のできの悪さを大会のせいにはしないこと、同時に大会の不振を試験のせいにはしないことの両方について日頃より話している。また、この状況は部員の保護者にも知らせており、了解してもらっている。

それでも試験を優先したい旨を申し出る学生がいれば尊重し、それにより選手が足りなくなるようであれば大会参加を見合わせることも考慮しているが、現在までのところ、このような理由で大会参加を断念したことはない。

部活動と定期試験であれば、当然のことながら定期試験を優先させるので、練習不足で大会に臨むこともある。単に大会で負けるだけなら良いが、次の4-3でも述べるが、練習不足により、大会に出場する際に怪我をするなど、学生の安全に関わることも十分に考慮し注意喚起する必要がある。

#### 4-3 部活動における学生の安全

運動部の活動において学生の怪我はしばしば起こる。バスケットボールで頻繁に起きる怪我は、足首の捻挫、膝や腰の痛み、打撲、突き指等。また、衝突による切り傷や、ディフェンスの手が相手の目に入るなど、種類や重さも様々である。

基礎練習中に起こる怪我は主に気のゆるみが原因であり、練習に集中していないことにより怪我をすることが多いので、常にそのあたりの注意指導を怠らないようにしている。しかし、不可抗力で起こる怪我もあり、さらに顧問やコーチが不在の練習中に怪我が起きることもある。

特に放課後練習の場合は病院の診療時間が過ぎていることもあるので、場合によって救急指定の病院へ連れて行く必要もある。

怪我を考慮すると、運動部の練習の場合は顧問やコーチの立ちあいが必須であるが、実際には練習時間全てに立ちあうことができていない。

#### 4-4 顧問教員にかかる負担

対外試合等の引率については、小山高専のバス

ケットボール部の場合、6人の顧問と1人の外部コーチの7人のうち、2人が引率する体制をなるべくとるようにしている。4-3にも関係するが、学生が怪我をした場合、1人が病院へ付き添い、もう1人が他の学生を引率できるようにするための配慮である。ただしこれを忠実に実践しようとすると、バスケットボール部の遠征が年間20日程度、2人ずつの引率で計算すると、1人あたり年間5～6回の引率となる。

また、現在JBA公認コーチライセンスは7人中2名しか所持しておらず、今後2015年度から公式大会におけるコーチライセンス取得者の帯同が義務づけられると、ライセンス取得者の教員が必ず引率に参加しなければならないことになる。

県大会等の試合の指揮をとるために必要なJBA公認D級ライセンスを取得するには、40時間の実技講習を受講する必要がある。受講料や毎年の登録料という金銭的な負担に加えて、資格維持のためのリフレッシュ講習を受ける義務も発生する。

また、高専大会は地区大会を勝ち上がれば、全国大会への出場権が得られるが、全国大会で試合の指揮をとるためには、さらに上位のC級ライセンスが必要となり、これらのライセンス取得については、体育科の教員を除く顧問教員にとってはかなり大きな負担になる。

また、小山高専のバスケットボールでは外部コーチに指導の一端を協力してもらっているが、ほとんどの活動はボランティアである。小山高専では年間の上限5～6万円として、外部コーチの指導料を出してもらっているが、外部コーチに県外遠征の多くに参加してもらおうと直ぐに足りなくなる。また、一般的には適当な外部コーチは、なかなか見つけることが難しい。たとえ外部コーチが見つかったとしても、顧問教員との関係づくりにおいては様々な配慮が必要となる。

#### 4-5 部活動にかかる経費

3-2で述べた有用性の裏返しになるが、他県への遠征や宿泊を伴う遠征が多いことは、部員たちの意識やモチベーションを高めることには良い効果があるが、そこにかかる経費という面から見ると、学生の負担が大きい。

バスケットボール部で年間にかかる支出はおおよそ以下の通り。

チーム登録、選手登録	10万円	
大会参加料等	5万円	
県外遠征（宿泊費含む）	90万円	
備品および備品補修	10万円	
消耗品（テーピング等）	5万円	計 120万円
収入		
学校からの補助	45万円	
学生会からの補助	25万円	
部員(学生)からの集金	50万円	計 120万円

上記の収入で、学校からの補助には、高校等の公式大会における選手分の交通費が含まれているが、実際の試合は選手以外の者も連れて行くので、この交通費は部全体の予算収入に算入して、選手個々には配っていない。学生に旅費を補助するのは、高専大会と栃木県内大会のうち県北で開催される場合のみである。以上のことは入部時に学生および保護者に連絡し了承してもらっている。

従って学生は上記集金分以外にも県内の大会や練習試合の旅費は自己負担し、さらに新入部員はゲームパンツの購入代金も負担している。

以上を換算すると部員1人あたりの年間支出は新入部員が5～6万円程度、その他の部員が4～5万円程度になる。低学年の場合は部活動にかかる経費を保護者が出してくれる場合も多いが、上級生は自分でアルバイトをして支払う者もいる。遠征費を支払うことができないために遠征参加を見送る部員も希に存在する。

最近、高校大会においては、保護者が自家用車を出して学生の送迎をしてもらえることも多い。自分の子供だけでなく近隣の部員も一緒に乗せてくれる場合もあり助かっている。

## 5. まとめ

3で述べたとおり、高専における部活動の有用性は多岐に渡っていることは明らかであり、それぞれについて繰り返す必要はない。特に高専という年齢幅の大きい学生が同時に活動することが、部活動についても有効性を高めている部分があることも述べた。

特に高専は、教員も学生もそれぞれの専門分野に偏りがちな面がある。専門性を高めることは重要であるが、幅広い視野を身につけ、様々な人間関係の中で生き抜く力をつけるために、課外活動

は重要な役割を果たしている。専門学科に分かれているからこそ、その枠を超えた繋がりを同時に持つことが、課外活動を実践する学生にとっても、それを指導する教員にとっても、有意義なものになっている。

一方4で述べた問題点については、目下のところ、良い解決策は見つかっていない。特に学生の運動部離れについては改善が難しい。色々な条件をつけて強制的に入部させることで人数確保ができたとしても、自ら主体的に求める活動という意味合いが薄れてしまうと、その部活動の効果が半減する。たとえ強制的に入部させたとしても活動する課程でその良さや価値を学生自身が実感してくれれば良いが、そのためには指導する側の力量が問われる。

何か特定の部活動の活躍は、課外活動の意義を示す突破口になるかもしれないが、学校全体の課外活動を活性化するためには、数多くの部活動が同時に活性化していく必要がある。そのためには課外活動を指導する立場にある多くの教員どうしの情報交換と連携が必要不可欠であると感じる。

小山高専においては形式的にクラブ顧問連絡会という名称の会議が存在するが、ここ数年に渡り開催されていない。部活動指導に関わる大きなルール変更等がない限り開催されない性質の会議であるが、それとは別に、より気楽な相談や情報交換ができる場が必要と感じる。

## 6. おわりに

本稿では小山高専バスケットボール部の現状について述べ、その有用性と問題点についてまとめたが、有用性それぞれの項目毎にもう少し掘り下げた議論が必要であり、さらに問題点についてはほとんどが解決できていないことを考慮すると、今後も項目毎の検討が必要である。

従って、小山高専バスケットボール部の指導については、引き続き、部活動そのものに関わる内容として「指導体制の変遷と改革」、「独自の練習法と記録様式」、また、部活動を取り巻く環境に関わる内容として、「JBA公認コーチライセンスの取得と運用」、「地区大会の運営」、「保護者やOB会との連携」、それぞれの項目について別稿としてまとめる予定である。

## 参考文献

- 1) 児玉英樹, 奥村紀浩, 河野顕臣, 鈴木久博, 須甲克也, 米澤住己, 小谷明, 鈴木秋弘: 高専バスケットボール交流大会を企画・開催して, 高専教育第32号 pp. 705-710 (2009. 8)
- 2) 須甲克也: 保存答案データを利用した個人指導について, 高等専門学校情報処理教育研究発表会論文集第31号 pp. 113-116 (2011. 8)
- 3) 須甲克也: 課外活動指導における携帯メールの利用, 高等専門学校情報処理教育研究発表会論文集第30号 pp. 186-189 (2010. 8)

【受理年月日 2013年 9月30日】